

デザイナーのための経済コラム（11）

ポトラッチ(potlatch)・贈り物について

普通に人は、素直に考えれば、プレゼント、贈り物を貰えれば嬉しいものです。「贈り物」には地域性や古い歴史があります。一般に、物々交換で得たモノはプレゼントや贈り物とは誰も思いません。プレゼントや贈り物はあくまでも無償のもの、見返りを期待しないものと考えます。しかし、タダより高いモノはないとも言います。

日本では「お歳暮」、「お中元」の贈り合いが何時の頃から始まったのかは知りません。（お歳暮は室町時代から、またお中元は中国の道教が先祖の供養として始まった、という説があります。）磯田道史著の「武士の家計簿」には江戸時代の加賀藩の武士が上役に対しての接待や贈答でお金の工面に苦労していたことが書かれています。現在なら、贈賄や、公務員倫理規定に抵触することです。テレビの「水戸黄門」には定番の題材の一つです。新しくはバレンタインデーのチョコレートの贈り物の習慣は商業戦略であると分かっていますが、周囲の同調圧力に屈してしまうようです。

「贈り物」は社会学者・人類学者には格好の研究テーマにもなりました。フランスのマルセル・モース (Marcel Mauss・1872～1950) が「贈与論」の中で太平洋北西沿岸部の原住民の重要な文化として、原住民の裕福な有力者や家族が冠婚葬祭などの行事に客を招いてポトラッチと呼ぶ宴会で、もてなしをし、富の再配分を目的としていたといます。モースがフランス人として原住民の中に見たのは「ノブレスオブレージュ」だったかも知れません。本当はもっと広い層で行われていた伝統かも知れません。また、南太平洋の島々にも似たような習慣があつて、部族が相互に贈答の競い合いをしていたと言います。さらに、アラビアの砂漠遊牧民のベトウインは見知らぬ旅人であっても、頼られて来られると決して追い返さずに面倒を見るという伝統があると聞きます。現在もそんな伝統が残っているのかは不明です。しかし、部外者には伺い知れないイスラムの世界には残っているようにも見えます。似たような話として華僑の世界では信用されるまでが大変で、ひとたび信用される後は付き合いやすいとも言います。

これらの善意と思われる贈答とは反対に、相互の憎悪の応酬が喧嘩やかたき討ちでそれが大きな規模になると、武力紛争、戦争になります。戦争には大義・正義という建前で始めますが、本音では経済的利益、政治的覇権が背後にはあります。平和とは経済的均衡、武力均衡とも言えます。

貨幣経済になっている現在のグローバル経済社会では信じられないような話と思われるかも知れません。しかし、現在の国際社会においても、ODA（開発途上国経済支援基金）WFP（世界食料支援機構）、WHO（世界保健機構）、NGO（非政府機関）のボランティア活動があります。現在進行中のCOVAX（発展途上国向け covid19 ワクチン世界供給）は通常の経済活動、国際貿易ではありません。無償の支援活動です。どんな無償の活動、見返りを期待しない行動であっても、その背景には利益を生み出す生産活動、余剰生産物、可処分所得、経済倫理があつてこそ出来ことであり、見返りを求

めないといっても、友好関係、安全保障の目的があります。それらの活動が経済効果としての金額は国家レベルでは経済統計に反映されます。マクロに見ても、ミクロに見ても、金額として表に出てこないものがあります。領収書の発行されないボランティア活動の人件費、生産機会損失費用は表には出てきません。各種の組織、団体で領収書のない表にでない金額数字があることとなります。金額数値だけでは評価できない経済活動があることを意識した新しい思想がSDGsとも言えます。

(T,K.記)